様式４

令和4年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議　参加報告書　兼　アンケート

参　加　会　議：	第7回会議（経済学分野）
所属機関・部局・職名：	福岡大学・経済学部・講師
氏　　名：	秋本清香

１．ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名（3 名程度）を挙げ、記載してください。〕

この会議は 2020 年に開催される予定であったが、COVID-19 によって、1 年延期し、さらにもう 1 年延期し、今年 2022 年にようやく開催された。2020 年には会議の代わりに、受賞者たちのディスカッションをオンラインで見ることができる“Online Science Days”が開催された。このイベントも有意義なものであったが、受賞者の研究に対する熱意やオーディエンスへのメッセージなど、対面形式の方がより強く伝わってくるものがあった。また、受賞者のユーモアに会場が沸き、講演にも熱が入るといった場面もあった。そのため、無事に参加でき、会場の一員としていることが嬉しく、研究意欲もかき立てられた。

最も印象的なのは Aumann 氏であり、会場を盛り上げた受賞者の 1 人だと思う。Mainstream Economics と Behavioral Economics に関する講演であり、前者は人々は合理的に行動すると考え、後者は人々は rules of thumb によって行動すると考える。Rules of thumb は時間とともに変化したきたため、多くの場合、それによってもたらされる行動は合理的である。そのため、この 2 つは決して相反するものではない、といった内容であった。内容自体も興味深く、多くの人を惹きつけるプレゼンテーションであった。

Stiglitz 氏も強く印象に残っている。マクロ経済学でよく用いられる DSGE モデルは 2008 年の金融危機や COVID-19 のパンデミックのような大きな経済変動を上手く説明できない。そのため、“Dynamic Disequilibrium Theory with Randomness”を新たに構築し、現在のアメリカにおける深刻なインフレを分析、そして有効な政策を提言する、といった内容であった。専門分野と最も近い講演内容ではあったが、Dynamic Disequilibrium（動学不均衡）モデルは聞きなじみがなかったため、とても勉強になった。

２．ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流（食事、休憩時間やエクスカーション等での交流）の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名（3 名程度）を挙げ、記載してください。〕
どの受賞者も若手研究者との交流を楽しんでいる様子であり、受賞者同士で議論し合う姿も度々見られた。 Stiglitz 氏はどのような質問に対しても、熱意を持って真剣に答えてくれた。また、にこやかな表情で楽しそうに話してくれたため、緊張がほぐれ、会話を楽しむことができた。Pissarides 氏とは、10 人ほどの若手研究者とともに、昼食を一緒にする機会があった。しかし、ほとんど話すことができず、悔いが残った。不甲斐なさを感じつつ、自分の課題がみつかる昼食会となった。

３．諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。
様々な人たちと交流し、いろいろな話を聴くことで、知見を広げることができた。特に、ノーベル賞受賞者の講演後の休憩時間に講演内容について意見を交わし、理解を深めることができたのは非常に良かった。このようなことはオンラインでも不可能ではないが、気軽に話すことができるというのは、やはり対面形式の良さだとつくづく感じた。 また、話の輪に積極的に入っていく研究者が多くいた。それが自身の研究範囲かどうか、詳しいかどうかにかかわらず、あらゆる社会・経済問題に関心を示し、議論に参加しようとする姿勢は見習わなければならないと強く感じた。

４．日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。
同じ日本人の参加者といっても、住んでいる国や研究分野、ポジションなどが異なり、研究や就職に関する真面目な話だけでなく、面白い話もたくさんあった。多くの刺激を受け、非常に有意義な時間となった。

５．特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム（イベント）を3つ挙げ、その理由も記載してください。
・Next Gen Economics 若手研究者による研究発表。 興味深い研究もあり、質問に行くのをきっかけとして、交流することもできた。 ・Laureate Lunch ノーベル賞受賞者との昼食会。 事前に申し込みが必要で、上限の枠がすぐに埋まる受賞者もいた。個人的には悔いの残る昼食会になったが、受賞者と静かな場所で、美味しい食事とともに話す機会が得られる貴重な会である。また、興味関心が近い研究者が集まるので、話しやすいと思う。 ・Boat Trip 豪華な船でマイナウ島へピクニック。 自然豊かな島でのんびりできる。

６．その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット〔具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。〕
会議を通して得られた新たな視点や考え方、そして交流関係は、研究の視野を広げることに役立つと思う。

7．リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。
まずは、自分の研究に反映することが考えられる。また、この会議では、新たな知見だけでなく、相手の興味関心を引きだすようなプレゼン方法や話し方のヒントを得た。それを生かし、経済学に興味のない学生に少しでも経済学の面白さに気付いてもらえるような講義をできるようにしたいと思う。

8．今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ
ただ参加するだけでも、様々な知見や経験が得られる貴重な機会です。しかし、より有益なものにするためには、勇気が必要だと強く感じました。ノーベル賞受賞者や他の研究者に話しかける勇気、会話に飛び込んでいく勇気、Next Gen Economics などで発表する勇気など、分からないことが多く、消極的になってしまいがちですが、とりあえず勇気を持って少し行動すれば、より良いものになる（なったのだろう）と思います。

（以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。）